

目的 取人の在来型労働着は印締纏・腹かけ・股引・足袋、どうりなどをその構成要素としていたが、オ2報に続き今回は、ほきものをとりあげた。労働用として危害防止・衛生的見地から着用されることになつたほきものは、機能性優先の必然性から、使用者の要求に答えた形態が模索されつつ変ぼうをとげている。現在は近代化の波に洗われ、取人の作業形態も大きく変わり、昔日の面影はわづかに残るのみである。その時代の社会生活と経済性に強く影響を受ける在来型労働着を見きわめ、その形態・構成・縫製技術・着装などを究明するには、着装経験者と製作技術保存者の生存する期間のみで、急を要すると思われろ。

方法 歴史的面からは文献・絵画資料を基とした。実態採録の対象者としては、着用面からオ8オ9になる江戸消防会会長・木村仁助氏を、製作面からは、足袋・股引技術保存会会長森村政吉氏を代表とする複数の人びとを選んだ。労働用ほきものはおか足袋の発達と深くかかわっており、製法の相違などを知るために、明治初期の裁縫書なども参照した。

結果 屋外労働に際しては、はだしで従事する時代が長く続いたが、庶民階層に、わらじ、どうりの使用と足袋が広く普及するとともに、甲かけ、爪かけ、踵かけ、わらじがけ、大津足袋、鷹匠足袋、取人用おか足袋などと変遷し、改良のあとがみられた。縫製に於ては平面より立体構成に移る過程に改善がみられ、着装面から鼻緒やかえしなど足部の軽はずれ防止におか足袋との製作上の違いが認められた。生産は自家製作に始まり、長物師に主力が移り、家内工業、工場制へ次第に変転している。